

青春

上文殊小学校 PTA 会長だより vol. 1

上文殊小学校 PTA 会長だよりとは

上文殊小学校 PTA 会長が、普段の小学校の様子を PTA 会長の視点から捉えたものを保護者の方々にお伝えすべく発信するお便りです。皆様の学校の見方・考え方が拓かれたら幸いです。

発行日：令和 6 年 6 月 2 6 日（水）

作成者：福井市上文殊小学校 PTA 会長 川崎耕介

令和 6 年度 第 1 回家庭・地域・学校協議会に参加して

6 月 2 0 日(火)の 8 時 1 0 分より、上文殊小学校で行われた「令和 6 年度 第 1 回家庭・地域・学校協議会」に参加しました。この協議会には、PTA 役員をはじめ、公民館の方や足羽東こども園の方等の地域の方が出席され、小学校の先生方と小学校の現状を踏まえこれからどうしていくとよいかについて協議しました。今回のおたよりでは、協議会において勉強中の教室を見てまわった時の各学年の様子と、私が感じたことを徒然なるままにお伝えしていきたいと思います。

「5・6 年生の連音発表会」

6 月 2 5 日に行われる連合音楽会に向けて 5・6 年生が練習してきた「マイバラード」を 1～4 年生、5・6 年生のお家の方へ披露していました。その歌声は 1 5 人で歌っているとは思えない声量と、よく練習してきたんだろうと伝わってくる音色で飾られていました。特に 6 年生はこの小学校を巣立つまで 9 カ月。6 年生としての節目となる行事を一つ一つ大切に精一杯生きていることが、その歌声から伝わってきました。1～4 年生からは、そのような気持ちが伝わったような感想が多く出ていました。



「1 年生の元気で気持ちがこもった音読」

1 年生の教室に向かって歩いていると、教室の方から先生と 1 年生の元気な声が聞こえてきました。何を話しているのだろうと耳を傾けると「～かぶはぬけません」と聞こえてきました。「大きなかぶ」の音読を先生と 1 年生が行っていたのです。先生のあとに続いて音読する子供たち。声のボリュームはこれぐらいか。気持ちをこめて読むとはこういうことかと、思考を巡らせ、先生の声に似せながら音読する姿から、音読も言語について学ぶことの 1 つのアプローチなのだなと感じさせられました。音読あなどれず。



「2・3年生の複式学級」

2階に上がり2・3年生の教室に入りました。そこには、10年ほど前に私が越廼小学校で勤務していた頃に見ていた景色が広がっていました。一つの学年は体を黒板の方に、もう片方の学年は窓側に設置されたホワイトボードに向けて座っているという光景です。これは複式学級と呼ばれる、2学年が1つの教室で学ぶときのスタイルで、お互いに背を向ける等様々なスタイルの学び方があるのですが、担任が指示を出しやすいこと、教師がひと目で子供の様子を把握しやすいこと等から、このような教室配置を上文殊小学校はとられたようです。



私も複式学級をもっていた時はこのような配置で授業をしていたものですから、どこか懐かしさを感じました。さて、子供の学びの様子はというと、2年生は先生と共に「こんなものを見つけたよ」というテーマで、もんぴーたん等の特徴をまとめていました。3年生は意味調べをめあてとして、自分たちで国語辞典を使って「引用」や「出典」などの言葉の意味を調べていました。今回の授業では短時間の参観でしたので、子供同士の対話は見られませんでした。授業の展開において先生がいなくても自分たちで授業のめあてに応じた対話を自分たちで生み、自分たちで学びを耕していく光景が複式学級の授業では沢山見られます。おそらく上文殊小学校の複式学級においても、先生が遠くでしか見られない時間がメリットとなり、子供が主体となる学びが展開されているし、展開されていくのでしょう。

「4年生は図形の学び」

さて、2階の奥教室では指定された辺の長さの長方形や正方形を自分なりのアプローチでかく授業が行われていました。辺〇〇、角〇〇といった表記の基本概念をふまえながら自身の思い描く形を、目の前のノートにかき表していく光景は、高学年や中学校における図形の基礎概念獲得、多くのアプローチから1つの答えに迫る算数の楽しさを感じることに寄与しているなと感じました。余談ですが、先述の「5・6年生の連音発表会」では4年生の見事な司会ぶり、感想発表が見られ、今年から委員会が始まったからか、昨年と比べしっかりしてきたなという印象を受けました。



今回、家庭・地域・学校協議会に参加して感じたことは、子供たちが1日のほとんどの時間を過ごしている小学校で、子供たちはもっている力を精一杯出しながら、一生懸命生きているなということです。それは、その先に子供たちは「自立」していくことを目指して歩んでいるとも言えるのではないかと考えられます。小さい赤ちゃんの時は、あれだけ親の助けが必要だった子が、少しずつ親の手をはなれ、目をはなれても自分の力で生きることを学んでいるのでしょう。しかし、子供の自立を目指すといっても、手や目がはなれても、心は必ずはなさずに子供と接していきたいものです。そのような子供の姿と共に、その成長を支える様々な方々の支えを感じられる機会となりました。